

## 中世武家礼法としての小笠原流の特徴と日本の道德教育

柴崎直人

岐阜大学教職大学院

Features of Ogasawararyu as Medieval Samurai Politeness and Moral Education in Japan

Naoto Shibazaki

Gifu University, Graduate School for the Teaching Profession

### 1. はじめに

本論文は、現代日本の学校教育において、中世武家の流派礼法のひとつである小笠原流礼法が有する価値について考察することを目的としている。

日本人の学びの場として設置されてきた「学校」は、近代教育制度の導入以前からも、藩校や郷学、私塾など、様々な階層を対象としたものが設置され、各地において普及がなされてきた。たとえば日本最古の学校史跡であり日本初の高等教育機関でもある栃木の足利学校や、藩校としては幅広い学問を採り入れた「総合大学」ともいえる水戸藩の弘道館、郷学としては世界最古の庶民のための公立学校である岡山藩の閑谷学校、私塾としては近世日本の最大規模の私塾である豊後国日田郡の咸宜園などである。これら4つの「学校」は、文化庁によって2015年に一括した日本文化遺産として認定されているが、そのタイトルは「近世日本の教育遺産群—学ぶ心・礼節の本源—」であった。

文化庁への申請書の冒頭には「概要」として次の記述がみられる<sup>(1)</sup>。

「我が国では、近代教育制度の導入前から、支配者層である武士のみならず、多くの庶民も読み書き・算術ができ、礼儀正しさを身に付けるなど、高い教育水準を示した。これは、藩校や郷学、私塾など、様々な階層を対象とした学校の普及による影響が大きく、明治維新以降のいち早い近代化の原動力となり、現代においても、学問・教育に力を入れ、礼節を重んじる日本人の国民性として受け継がれている。」

ここでは学校の普及と日本人の国民性である「礼節を重んじる」ことの関係性が指摘されている。また、その説明として「3 現代に継承される近世日本の教育」に次のような記述を見ることができる。

「近世の日本ではこうした学校とその周辺を取り巻く環境を舞台に営まれてきた教育の成果によって、世界でも類を見ないほどの高い教育水準を実現し、それが明治維新以降のいち早い近代化の達成につながりました。一方、こうした教育は、礼節を重んじるという日本人の国民性を形づくってきました。現在、日本人のマナーの良さは世界中で高く評価されています。まさに近世日本の教育は、現代にも継承されている「世界に誇る日本の教育」だったと言えるでしょう。」

つまり、近世日本の学校教育が、世界中で高く評価されている「日本人のマナーの良さ」に代表される、礼節を重んじる国民性を形作ったというのである。

実際に、これらの藩校や郷学、私塾などにおいては、「礼法」をはじめとしてさまざまな形で、礼儀に関する教育課程や内容が設置されていた。

このように礼儀は、自他ともに認める日本人の国民性の特徴であり、それは近世から現代に継承される

学校教育の成果とされている。また現代においても社会生活を営む上で重要な要素とされるが、保護者や一般社会における礼儀の教育への期待がきわめて大きいにもかかわらず、日本の学校教育においてこれまで大きく注目されることはなかった。礼儀は道徳教育で扱われる道徳的価値のひとつにすぎず、その取り上げられ方についても従来は挨拶を中心とした一面的・一過的なものが中心となっていた。礼儀をその内容項目に含む道徳教育における指導も、十分な形では行われてこなかったといえる。礼儀に関する指導の十分な実施が、日本の学校教育の今後の課題となっている。

このような状況において、日本の学校教育は、礼節を重んじてきた従来の日本の姿を実際に現代に伝えてきたと言えるのだろうか。礼儀の本質をとらえ、日本のコミュニケーション文化を継承して、従来の礼儀の教育を展開できているのだろうか。もしそうならば、それはかつてのものが、どのような形で指導されているのか。もしできていないとすれば、それはなぜか。また、それらの中から現代の礼儀の教育に活用できる手掛かりは得られないだろうか。ここでは、それら日本の学校教育における礼儀の諸相について検討する視座として、日本の流派礼法の代表とも位置づけられる「小笠原流礼法」をとりあげる。

小笠原流の説く礼儀が、どのような特徴を備えているのか、そして学校教育の場においてどのように用いることが望ましいのかを検討することにより、現代における礼儀の教育に新たな指針を示すことができるだろう。

本論文においては、その前提ともなる、小笠原流礼法の特徴を抽出し、それと日本の学校教育、とくに道徳教育との関係に着目して考察を試みる。

## 2. 小笠原流礼法の特徴

礼儀はごく一般的に必要とされる人の営みとして、社会のあらゆる場所での教育が行われてきた。

家庭や村落共同体はもとより、奉公先や勤務先など、所属するあらゆる集団において礼儀は求められ、またそこで求められる礼儀の水準を満たす指導が、古今東西の文明社会において展開されてきた。

学校教育で扱うことが可能と考えられる「礼儀の内容」としては、実に129項目が挙げられる<sup>(2)</sup>ほど、礼儀の内容は多岐にわたる。中でも、礼儀の本質と小笠原流礼法の特徴をよく伝えられる代表的な内容は3種を挙げることができる。「お辞儀」「物の受け渡し」そして「礼の省略」である。

### (1) お辞儀

お辞儀は礼儀を象徴する重要な行為である。

小笠原流礼法第三十二世宗家の小笠原忠統は、お辞儀を「人に対する敬意を心から示す動作」と述べ、武家の秩序を守る中で伝承され、その種類について「TPOに従ってヴァリエーションも多い」と、歴史的背景を伴った多様性について指摘している<sup>(3)</sup>。

その重要性について、日本的ホスピタリティとしての「おもてなし」に注目し、お辞儀の重要性に関連して人間工学の立場から研究を進める太田らは、「おもてなしは挨拶に始まり挨拶に終わる」とさえ言われることを踏まえ、研究の第一歩として日本のお辞儀に注目した、と述べている<sup>(4)</sup>。

また、お辞儀の社会的文脈の適切さを研究する柴田らは「日本人に頻繁に用いられる非言語コミュニケーションのひとつ」であると指摘し<sup>(5)</sup>、現代日本人のコミュニケーションにおいても広くみられることを指摘している。

人が他者と関係を作る基盤となるのは「このひとと関係をつくりたい」「かかわりたい」とする意思である。自分ひとりだけでそう思っている、望ましい人間関係は成立しない。相手にもやはりこちらと「かかわりたい」と思ってもらい必要がある。その基盤を構築する基本的かつ重要な営みとなるのが挨拶であり、挨拶を非言語的に表現したお辞儀である。

お辞儀の本質は「私はあなたの存在を認めています」という意思を伝達するところにある。

個人にとって最も不快な仕打ちの一つと考えられるのが、他者から蔑ろにされることであろう。その最たるものは無視である。自分の存在を認めてもらえないことは、人としての尊厳にかかわる重大な出来事

であるがために、忌避すべきこの行為を行わないように、さまざまな工夫を文明化とともに人類は積み上げてきた。そしていかなる文化圏においても、他者との友好的な関係をつくろうとするとき、そこに共通する行為として挨拶が存在している。その日本的な表れがお辞儀である。

お辞儀は挨拶や謝罪、感謝など、さまざまな感情を表す仕草であり、言語的な表現と共に用いられることもある。そして日本文化的には、後者のほうが格の高いふるまいと認識される。言語的表現よりも非言語的な表現のほうにコミュニケーション上の重きを置くのが日本文化の特徴である。「目は口ほどにものを言い」といわれるが、非言語情報の中に真実が表出する、という特徴が、挨拶におけるお辞儀の重要性を支えている。

小笠原流礼法においては、丁寧なお辞儀は「礼三息」といって、上体を傾けるときに息を吸い、ある角度まで傾けたら動きを止めて吐き、吐き終わったら息を吸いながら上体を上げる、という息遣いをする。そして上体が上がりきった後も、もう一度相手を見て無言のまま挨拶の意を再度込める。これを「残心」という。手は自然に体の前に垂らしておき、上体が傾くにつれて、傾いた分だけ自然に膝方向に下がる。上体が上がり始めると、それに合わせて自然に引き上げられる。手のひらは重なることはない。

また、正式の場合、お辞儀という仕草と挨拶の言葉は分けて行うものとされる。もっとも丁寧なお辞儀の方法は、まず45度程度の敬礼を行い、いったん15度程度まで引き上げてから上体を止め、言葉を述べる。述べ終わったら再び45度程度まで上体を傾け、元の直立に戻る。つまりお辞儀とお辞儀の間にあいさつの言葉が挟まれるのが最上の挨拶とされる。

以上が小笠原流のお辞儀の特徴である。

柴田ら<sup>(6)</sup>は、「お辞儀における頭を下げる動作は、もともとは無抵抗の表現で敵意がないこと、服従を伝える動作であった」と指摘する。また、樋口清之はお辞儀について、無抵抗の表現である。身体のかなでも大事な頭をさげる動作は相手に敵意のないことを伝える行為であり、敬意表現という発想はのちのものである<sup>(7)</sup>としている。

このように、急所である頭部を相手に向けて無防備に晒し、差し出す行為は、敵意のないことを示す状態であり、そこから派生して、相手に対する信頼と、敬意の表明に進展していく。このようにお辞儀は、礼儀における最も基礎的・基本的な仕草であり、また同時に最も重要な意味を含んだ行為である。

以上のように、他者とのコミュニケーションにおいて敬意を示す基本的かつ中心的、そして古今において普遍的な営みの代表例が、お辞儀なのである。

## (2) 物の受け渡し

挨拶が時代を超えて普遍的であり礼の本質をシンプルかつ直截的に表現しているとするならば、時代によって、またさまざまな状況に応じてその内容が千変万化するのが「物の受け渡し」である。

誰が、何を、誰に、どのように渡し渡されるのが礼に叶うことになるのか。その営みを比較検討することで、それぞれの時代の礼儀の教育に対する要請を汲み取ることをも可能にするであろう。

小笠原忠統は、「ものの渡し方受け取り方は、そのタイミングや動作が時と場合にはまれば、人と人との心のつながりをスムーズにすることが多いだけに、昔から礼儀作法の中でも大きな比重を持っていた」と指摘する<sup>(8)</sup>。また、小笠原流礼法の原点ともいえる「七冊」という小笠原家伝来の古文書においても、「万請取り渡しの次第」がその丸ごと一冊を占めていることから、物の受け渡しが礼儀において重要な位置を占めることが伺える。

礼儀正しさの象徴ともいべき「お辞儀」においては人間工学や心理学をはじめとしてさまざまな研究が見られるが、礼儀としての「物の渡し方」や「受け取り方」に関する研究は皆無である。

受け渡しにおいて扱われる器物には様々なものがあるが、小笠原流礼法としては「両手で扱う」「重いものは軽やかに。軽いものは重々しく」など様々な考え方が存在する。両手で扱うというのは器物をより大切に扱うことにより、器物それ自体とそれを渡す(渡してくれた)相手への敬意を表すことになる。また、重いものを重そうに持つのは、「自分のために体力を使って苦勞してくれて申し訳ない」という心理的負担を

相手に与えることになり、軽いものを軽々しく扱うのはそれに関わる存在を軽んじることになりかねない。よって「重いものは軽やかに。軽いものは重々しく」という礼儀が存在している。

これが各時代においてどのような形で示されているかを比較検討することは、それぞれの時代で「礼儀」を特に託したい物品と、誰に渡すことを想定しているかの比較となり、礼儀について考察するうえで重要な示唆をもたらすものと考えられる。

### (3) 時宜と省略

挨拶は自身の身体を用いた礼儀の表現であり、物の受け渡しは、さまざまな器物の扱いを通して対象への敬意を伝えようとした礼儀の一形態である。これらはいわゆる何らかの言語的・非言語的表出を伴うものであるが、小笠原流礼法の特徴として、あらゆる礼儀は「時宜によるべし」とされる。広辞苑（第六版）によれば、時宜とは、

- ①時の丁度よいこと。また、その判断。程よいころあい
- ②その時にかなった挨拶。時儀。

とあり、時にあたって丁度よくかなった敬意の表出を意味している。つまりそのときの状況によって礼儀の表現は変化させるべきものということである。

礼儀に対する一般的な誤解の一つに、「礼儀には何か正しいとされる決まった型があり、それを教わった通りそのままの型で行うのが礼儀正しい」といったものがあるが、これは小笠原流礼法では忌避される思考である。

小笠原忠統は、礼儀について「水は方円の器に随う心なり」という礼儀の表現に関する小笠原流の伝書の記述を踏まえて、

「水がどんな形にも形を変えて従うように融通性をもって自然な振舞いで対処しなければならない。時、所、対人関係における自分の位置をわきまえて礼を行えば、これが礼の心であり行動なのである」<sup>(9)</sup>

と述べて、礼儀は相手やTPOによって臨機応変にその表現を変えるべき、「時宜による」存在であることを主張する。

またそれは究極的には「礼をしない」ことが礼儀に叶う、という思考を導くことにもなる。

例えば試合後に疲労困憊して息も絶え絶えの競技者に水を持っていくとき、入室時に一礼、近づいて一礼、水を置いて一礼、下がって一礼、退室時に一礼、などと「丁寧に」お辞儀をしたとする。

敬意のやり取りであるお辞儀は、当然ながら相手の礼への返礼を伴うのが礼儀正しいとされるため、一見丁寧に見えるこの作法は、実際には返礼を相手に強要している行為ともなっている。こういった状況の人物に返礼をさせる行為は、かえって相手をないがしろにすることになりかねないため、そのような場合には礼を省略するものと小笠原流礼法では考えられている。

これについては、小笠原忠統が皇族に「小笠原の流儀で接待をした」ときに、給仕への指導として皇族へは会釈以上の礼をしないよう指導したエピソードからも、小笠原流の礼儀の思想として特徴的であることが伺える<sup>(10)</sup>。

状況に応じて臨機応変に言語的・非言語的表出の高下や多寡を変化させるこの思想を、小笠原忠統は「礼の省略」と呼び、場合によっては何もせず自分の存在を消すことが、相手への礼に叶うと説いている。

たとえば病院に見舞いに行かないことが、衰弱している病人に対して場合によっては最適な見舞いであり、相手への礼に叶うこともある、という例が現代の日常生活においてはわかりやすい例であろう<sup>(11)</sup>。

このように、小笠原流を特徴づける「時宜による」「礼の省略」の思想は、礼儀の表出に作用するメタ認知的機能を持ち、それがどのように、どの程度扱われているかを検討することにより、小笠原流礼法の思想やその本質との関連を見出すことが可能になると考えられる。

## 3. 小笠原流礼法の特徴と学校教育

学校教育において礼儀は、主として道德教育の領域で教育内容として授業において取り上げられ、また、

特別活動の領域では、児童会・生徒会活動の一環として「あいさつ運動」が展開されるなど、多くの学校でその実践がなされている。

小学校及び中学校の学習指導要領には、特別の教科 道徳の道徳的価値の一つとして「礼儀」が示されている。学習指導要領において「礼儀」は、学習指導要領解説特別の教科 道徳偏において次のように説明されている。

#### 【小学校】

〔第1学年及び第2学年〕 気持ちのよい挨拶，言葉遣い，動作などに心掛けて，明るく接すること。

〔第3学年及び第4学年〕 礼儀の大切さを知り，誰に対しても真心をもって接すること。

〔第5学年及び第6学年〕 時と場をわきまえて，礼儀正しく真心をもって接すること。

人との関わりにおける習慣の形成に関するものであり，相互の心を明るくし，人と人との結び付きをより深いものにするための適切な礼儀正しい行為に関する内容項目である

##### 1) 内容項目の概要

礼儀は，相手の人格を尊重し，相手に対して敬愛する気持ちを具体的に示すことであり，心と形が一体となって表れてこそ，そのよさが認められる。つまり，礼儀とは，心が礼の形になって表れることであり，礼儀正しい行為をすることによって，自分も相手も気持ちよく過ごせるようになる。

また，礼儀は，具体的には挨拶や言葉遣い，所作や動作など作法として表現されるが，それは，人間関係を豊かにして社会生活を円滑に営めるようにするために創り出された文化の一つであるということが出来る。よい人間関係を築くためには，まず，相手に対して真心がこもった気持ちのよい応対ができなければならない。そのような応対は人としての生き方の基本であり，まずは大人が作法として教えることから始まる。それらを，さらに，例えば真心がこもった態度や時と場をわきまえた態度など礼節をわきまえた行為へと深めていくことが必要である。真心とは相手のことを親身に思いやる心であり，形となって表されることにより，誠意のある行為につながる。人との関わりにおいて，どのような振る舞いが好ましいのかを考えさせることは大切なことである。

小学校の学習指導要領解説には，他者の人格の尊重を基盤として，敬愛の気持ちを示す「形」が礼の表れであると示されている。そして大人がそれを作法として教えること，そのような礼儀正しい行為をすることで自他が気持ちよく過ごせることが説かれている。さらに，そのような行為が次第に時と場をわきまえた態度など，礼の本質ををわきまえた行為に深めることの重要性が示唆されている。

では中学校ではどのように示されているのだろうか。

#### 【中学校】

礼儀の意義を理解し，時と場に応じた適切な言動をとること。

##### (1) 内容項目の概要

「礼儀」は，他者に対するものであり，身に付けておくべき外に表す形であると考えられる。具体的には言葉遣い，態度や動作として表現される。社会生活の秩序を保つために守るべき行動様式であり，長い間に培われた習慣を表すものである。これは，人間関係や社会生活を円滑にするために創り出された優れた文化である。また，礼儀は，立ち居振る舞いが美しいかどうかという美的な問題として考えられてきた面もある。生徒は，物心がつく頃から，家族や地域の大人から挨拶を始め礼儀を教えられる。教えられ学ばなければ，礼儀は存続していかないものである。さらに，礼儀は，慣習に支えられているため，文化が違えば同じではなく，合理的に説明することができないことも多いが，長い歴史を通じて培われ伝えられ，大切にされてきたものである。

礼儀の基本は，相手の人格を認め，相手に対して尊敬や感謝などの気持ちを具体的に示すことであり，心と形が一体となって初めてその価値が認められると考えられる。敬愛の気持ちを伝えるために，相互

に認められる形が必要である。時と場に応じた適切な言動をとることで、自分と他者の間に認められてきたその社会固有のほどよい距離を保つことができるのである。礼儀にかなった言動が、互いを結び合わせるものであり、このことが礼儀が人間の生き方の基本にあると言われるゆえんである。形だけで心が伴っていないと批判され、形ができていたとしても人間尊重の精神がなければ礼は通じないとされる。この場合の礼という語は、他者を敬う態度や振る舞いであり、社会規範をも意味し、内面にある他者を愛する心が現れた礼節をわきまえた行為と考えられている。

小学校の学習指導要領解説が「礼儀正しい行為をすることで自他が気持ちよく過ごせる」とあるのに対し、中学校では「他者に対するものであり」とあり、「自身の気持ちよさ」という利己の視点が削られている点に注目したい。

つまり、発達段階に応じて「良いことをすると自分も気持ちいい」という発想からすすんで、「自分の内面にある他者を愛する心」として礼をとらえており、内面にある「自身の快-不快」から「他者への愛」へと礼の表出を促す要素が移行しているのである。

なかでも、相互に認められる形が必要でありながら、それは時と場に応じた適切な言動をとる、という記述に注目すべきであろう。他者への敬愛の気持ちをいくら示そうとしても、当該人物にそれが敬愛の言動と認識されなければ無意味であり、そのためにはTPOに即して適切なものでなくてはならない。小笠原流礼法における「時宜」の概念がそのままここに示されていると考えることができる。

また、これら学習指導要領とその解説と、小笠原流礼法の相違を指摘すれば、小笠原流礼法の特徴の「時宜と省略」における「省略」の概念の有無が挙げられるであろう。

「時と場に応じた適切な言動をとる」ことにおいて、必要に応じて礼の手続きや、場合によっては礼そのものを省略することが礼に叶う、という考え方が小笠原流礼法の特徴としてみられるわけだが、学習指導要領とその解説においては直接的に示されていないように見える。

このような状況下においては、ともすると、「礼儀正しい」とされる言動をすることをもってのみ、礼を表現する方法であるという段階で理解が停止してしまう可能性があることを棄却できないだろう。その状態が高じると、いたずらに「礼儀正しい言動をことさらアピールする」ことをもって自身の人間的価値を誇示しようとするような、道徳的には不適切な方向に意識づけがなされてしまう可能性すら考えられるのである。

そこで、小笠原流礼法における「礼儀の省略」の概念を、現代の道徳教育において活かすことで、上記のような懸念を払拭することが可能となると同時に、児童生徒における道徳的価値「礼儀」への理解とその育成に、いっそうの幅と深みをもたらすことであろう。

なお、平成20年公示の教科化前の学習指導要領では小学校、中学校の道徳における道徳的価値の一つとして次のように説明されていた。

#### 【小学校】

『礼儀は、相手の人格を尊重し、相手に対して敬愛する気持ちを具体的に示すことであり、心と形が一体となって表れてこそその価値が認められる。つまり、礼儀とは、心が礼の形になって表れることであり、礼儀正しい行為をすることによって、自分も相手も気持ちよく過ごせるようになる。また、礼儀は、具体的には言葉遣い、態度や動作として表現されるが、それは、人間関係や社会生活を円滑にするために創り出された文化の一つであるということができる。よい人間関係を築くには、まず、気持ちのよい応対ができなければならない。それは、さらに真心をもった態度と時と場をわきまえた態度へと深めていく必要がある』

#### 【中学校】

『礼儀の基本は、相手を一個の人格として認め、相手に対して敬愛する気持ちを具体的に示すことであ

り、心と形が一体となっではじめてその価値が認められる。したがって、敬愛の気持ちを伝えるためには、相互に承認された一定の形が必要になり、具体的には言葉遣い、態度や動作として表現される。これは人間関係や社会生活を円滑にするために創り出された優れた文化の一つのことができよう。しかし、どれほど形ができていたとしても人間尊重の精神がなければ礼は通じない。また、相手を思う気持ちがあったとしても、時と場にふさわしくない言動は人々の間では受け入れられないであろう。』

以上のように、礼儀は他者の人格を尊重し、敬愛する気持ちを心と形で表すものであり、それはTPO (Time Place Occasion:時・場所・場合) に応じて行われるべきものであるとされている。

教科化後の指導要領においては、小学校において、礼儀は「作法として表現される」というように、「作法」の語と、真心を持った気持ちの良い応対について「まずは大人が作法として教えることから始まる」という文章が加えられている。さらに「形となって表されることにより、誠意のある行為につながる。人との関わりにおいて、どのような振る舞いが好ましいのかを考えさせることは大切なことである。」というように、作法や形といった、礼儀を言語的・非言語的にする「行為」に関する内容が加えられている点が特筆すべきである。

中学校においては「敬愛の気持ちを伝えるために、相互に認められる形が必要である。」とまず「形」の必要性について指摘してから、礼について「内面にある他者を愛する心が現れた礼節をわきまえた行為と考えられている」というように、ここでも「行為」の語が示されている。

このように、教科化された道徳の学びにおいては、礼儀を学ぶうえで、礼儀の心を託した「行為」が扱われることが期待されている。

また、もっとも注目すべきは「時と場に応じた適切な言動」や「TPO」など、小笠原流礼法の特徴とされる礼儀の特徴が、現代の学校教育の学習内容としても示されていることである。

しかしながら、現実的には道徳の「読み物資料」に例示される「礼儀」の具体例は多様性に乏しい。

たとえば小学校教育における「礼儀」は、とくに道徳教育において扱われる重要な学習内容であるが、道徳副読本では高学年になるにつれ、その扱いが少なくなっていた。

礼儀の学びとしては低学年では「あいさつ」がその主たるものだが、高学年においてもなお、あいさつに偏る傾向が見られ、また礼儀の「動作」もあいさつを除けば6年間に各社わずか1～3例と、きわめて少なかった。これらは副読本関係者における「礼儀＝あいさつ」との固定観念と、日常生活における礼儀の具体的な内容への認識の低さを示すものと考えられている<sup>(12)</sup>。

道徳教育をはじめとして学校教育において礼儀を扱う際には、学校で扱いが可能とされる100種以上の内容を用いて、さらに小笠原流礼法の特徴であるお辞儀や物の受け渡し、そして礼の省略といったものを手掛かりとして礼儀の本質に向かう指導が望まれるであろう。

#### 4. おわりに

以上のように、現代日本の学校教育において、中世武家の流派礼法のひとつである小笠原流礼法が有する価値について考察を行った。

小笠原流礼法の特徴をよく伝える代表的な内容として、「お辞儀」「物の受け渡し」そして「礼の省略」の3種が挙げられ、その内容と構造、現代における意義について検討がなされた。そのうえで、現代の学校教育、とくに道徳教育との関連について検討がなされ、特別の教科 道徳における内容項目のひとつである「礼儀」の学びに関して、それら小笠原流礼法の特徴を元にする事で、礼儀の本質に迫ることができ、また、小笠原流礼法における「礼儀の省略」の概念を現代の道徳教育において活かすことで、上記のような懸念を払拭することが可能となると同時に、児童生徒における道徳的価値「礼儀」への理解とその育成に、いっそうの幅と深みをもたらすであろうことが指摘された。

道徳科の教科書など、学校教育における礼儀に関する教育内容に関して、この3つの特徴を用いて「礼

儀』の分析を今後進めていく所存である。

<引用文献>

- (1) 文化庁「日本遺産ポータルサイト」、  
<https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/stories/story001/>、2018年11月28日最終確認
- (2) 柴崎直人「マナー・礼儀作法の教育における1年間カリキュラムの構築  
『道徳と教育』No.312・313、2002年、pp.287-304
- (3) 小笠原忠統『小笠原流礼法入門』、日本文芸社、1989年、p44-47
- (4) 太田智子、武田知也「おもてなしの基本としての日本のお辞儀の動作・教示・印象に  
関する研究」『人間工学』、52巻Supplement号、2016年、pp.76-77
- (5) 柴田 寛, 高橋 純一, 行場 次朗「お辞儀の主観的印象と社会的文脈に対する適切さ」  
『心理学研究』2014年85巻6号 p. 571
- (6) 柴田 寛, 高橋 純一, 行場 次朗、前掲書、 p. 576
- (7) 樋口清之『日本の風俗の謎』大和書房、1984年、pp.28-29、p.33
- (8) 小笠原忠統『小笠原流礼法入門』、日本文芸社、1989年、p161
- (9) 小笠原忠統、前掲書、p21
- (10) 小笠原忠統、前掲書、p179-180
- (11) 小笠原忠統、前掲書、p180
- (12) 柴崎直人「小学校道徳副読本における『礼儀』の扱われ方」『道徳と教育No.330』、  
2012年、pp.21-31